



2012年3月7日放送

印象に残る症例②

和歌山労災病院 呼吸器科第二部長 辰田 仁美

私は内科医ですが、和歌山労災病院で平成15年から女性外来を担当しています。開設当初、当院の女性外来は女性医師が患者の訴えを聞き、症状に合った診療科を紹介していましたが、多様な主訴で受診する患者さんが多く、他病院の女性外来で漢方治療が有効な症例が多いと聞き、平成16年から漢方外来を設置しました。

前任の漢方外来の先生の診察を拝見し、漢方の勉強会に参加しながら私も漢方治療を行うようになりました。

本日は、多彩な症状を持つ患者さんが一剤の漢方薬でよくなり、大変喜ばれたので紹介いたします。

症例は50歳女性です。主訴は頭痛、手足の冷え、特に足の冷えが多い。胃が悪い、時々動悸がする、不眠です。

既往歴として43歳の時に乳がんの手術を受け、その後ホルモン治療をされていました。また、初診当時は不眠症に対してリルマザホン服用していました。

喫煙歴、飲酒歴はありません。

現病歴ですが、講演会で漢方の話を聞いて受診されました。

数年前より胃の調子が悪く、胃薬を服用していたそうですが、足の冷え、頭痛（寒いときは3日に1回程度）、動悸、喉のつかえなど多彩な症状があり、漢方治療を希望して受

診されました。

のぼせ、佇々感はありませんでした。

初診時に自分の症状をかいたメモを持参されました。

排便は1日に2回と便秘はありません。職歴として、週7時間スイミングのインストラクターをされています。

西洋医学的には、血圧134と70。ですが、眼球結膜 黄染なし、眼瞼結膜 貧血なし
甲状腺腫大なし、頸部リンパ節触知せず 胸部・腹部異常なし 下肢浮腫なし

漢方学的所見ですが、舌は軽度の歯痕を認め、白色苔もありました。舌下静脈の怒張ありません。脈は沈でした。

腹部は軟で、腹力はⅡ/V程度。両下腹部に瘀血の圧痛点があり、心下部冷感と振水音を認めました。

血液検査ですが、動悸がありましたので、甲状腺機能亢進症などを否定するために血液検査を行いました。特に異常を認めませんでした。

胃カメラは、胃粘膜は正常で、下壁に壁外性の圧迫像を認めましたが、後に行った腹部CTでは特に異常を認めませんでした。

虚証で、「喉のつまり」からは気うつ・気滞、両下腹部瘀血圧痛点からは瘀血の合併、心下部振水音からは水毒の可能性が考えられました。スイミングのインストラクターをされていたので、比較的元気なのかと思いましたが、まずは、「脾胃を立て直す」ために、六君子湯を4週間処方しました。

4週間後、薬はおいしく服用でき、食欲が出てきたということです。胃の調子が良くなり、胃薬はやめて漢方薬だけを服用しているとのことでした。

舌の所見ですが、白色苔は残っており、上腹部の冷感、両下腹部に瘀血圧痛点は残っていましたが、心下部振水音は消失していました。

その後、のどのつまりは消失し、現在まで1年半継続中です。その間に調子が良くて3日間服用しなかったら舌がザラザラしてきたので、服用を再開したこともあるようです。また、動悸については、全く消失したわけではないようですが、気にならなくなったとのことでした。治療が必要な疾患は否定できているので、経過観察としています。

寒い時は3日に1回起こっていた頭痛も、漢方服用後、月に2-3回程度と減少し、市販の痛み止めですぐに改善する様になりました。

足の冷えも完全になくなったわけではないようですが、頭痛同様につらい状態ではなく、六君子湯を継続しています。

六君子湯の出典は「万病回春」です。

「脾胃虚弱にして、飲食少なく思ひ、或いは久しく瘧利（ぎゃくり）を患ひ、もしくは内熱を覚え、或いは飲食化し難く、酸を作し、虚火に属するを治す」とあり、脾虚に痰飲（たんいん）を伴う証に適応する方剤となっています。

補気剤の代表である四君子湯（人参、蒼朮・茯苓・甘草・生姜・大棗）に陳皮・半夏を加味した処方になっています。人参湯に比べると冷えや下痢傾向を改善する効果は弱いですが、心下の水滯による上部消化管症状（胃もたれなど）を改善する効果には優れています。

「胃の調子が悪い」と訴える患者さんの多くは、食欲不振・悪心・胸やけの症状があり、これを気・血・水の観点からみると気虚と水滯を伴うことが多いと考えられます。上部消化管の機能が失調し、食欲不振・悪心・むねやけ等の症状が出現すると、必要な栄養素等の消化吸収に障害をきたし、徐々に熱生産レベルが低下し気虚の状態に移行します。上部消化管の機能低下は消化管のトーンス、排出機能を伴うことが多く、同部に液体貯留を来たします。

また、逆に不安・不眠は気血水の概念では気が停滞したり気鬱の状態ですがそれが原因となり消化器症状が増悪している場合があります。

本症例は当初はのどのつかえから始まったようですが、そのうちに胃の調子も悪くなったことから、気うつ・気滯が長期に及んだために、気虚となり、種々の機能が低下し、消化器の機能も低下したものと思われます。初診時の主な症状は胃腸障害でしたが、患者が自分の症状を書いたメモを持参したので、気の異常が加わっていることは容易に推察されました。

女性外来を担当していると「のどのつまり」（梅核気）を訴える患者さんがたびたび来られます。このような咽頭違和感には半夏厚朴湯がいい適応です。半夏厚朴湯は代表的な理気剤で、半夏・厚朴・茯苓・蘇葉・生姜から構成されています。気の鬱結（うっけつ）により痰涎（たんえん）が凝集して起こる症状を治すとされ、気がふさがっているのを開き、痰飲を散ずる方剤です。私も外来で半夏厚朴湯を用い、著明に改善した症例を何例も経験しました。

今回の症例は六君子湯を用いましたが、当初「のどのつかえ」が出現したころに受診されていたら、半夏厚朴湯を使用していたかもしれません。

以前他の労災病院と協力して女性外来受診者にアンケート調査を行ったところ、532名中311名、58.4%は女性外来受診にストレスが関与していると答えました。

ストレス反応によって生じるストレス性疾患としては

- ① ストレス状況にうまく対処、適応できないために生じる適応障害

- ② 気分障害や不安障害などの精神疾患、覚醒レベルの亢進による精神生理性の不眠症
- ③ 臓器の器質的かつ機能的な障害である心身症
などがあります。

これに対する生体の防御反応は4つ挙げられます。①交感神経—副腎髓質系、②視床下部—下垂体—副腎皮質系、③視床下部 - 下垂体 - 性腺系、④疼痛の下降性抑制系 です。

心理社会的ストレスが加わると、交感神経—副腎髓質系、と視床下部—下垂体—副腎皮質系は亢進し、視床下部 - 下垂体 - 性腺系と疼痛の下降性抑制系は抑制されます。これは生体を守るために合目的な反応ですが、同時におおくの疾患の発症や増悪因子になります。

今回使用した六君子湯の処方構成の中で、人参・大棗、生姜は、視床下部—下垂体—副腎皮質系の亢進を抑制する作用が知られています。漢方では、人参と大棗は消化機能を助け、生体を元気にするため（補気健脾）に用い、生姜は気を体のすみずみまで巡らせる（理気）に用います。従って心理社会的ストレス状況で心身ともに疲弊し、食欲不振がある場合、六君子湯はよい適応となります。

また、ストレスに対処するための 交感神経—副腎髓質系、と 視床下部—下垂体—副腎皮質系の亢進は多くのエネルギーを必要とします。現代社会を生きていく上で、多くの人はストレスを感じながらも健康を維持しています。その理由の一つは、生体にストレスに耐えられるだけの十分なエネルギーがあり、ストレス状況に対応できるからです。一方、適応するエネルギーの少ない気虚の状態では、わずかなストレスでも健康を障害する原因となります。このような場合は、人参・黄ぎを含んだ六君子湯、補中益気湯などのよい適応となります。

まとめです。

本症例を西洋薬で治療しようとするとう複数の薬が必要になります。複数の生薬で構成された漢方の素晴らしさを実感できた症例でした。